

御神紋

日本の神社には、通常、独自の装飾的な紋章、つまり神紋があります。神紋には、その神社の主祭神や地域の名称、宮司家の家紋などが反映されています。出雲大社の社紋は、もともとは宮司家の家紋でしたが、少なくとも 17 世紀には社紋として採用されました。境内の建物に飾られているほか、大社で頒布されている御守にも多く見られます。

出雲大社の紋の内側のモチーフは、剣の刃で分けられた四弁の花で、それを亀の甲羅の稜線に似せた二重の六角形（亀甲）で囲んでいます。この六角形は、亀と蛇が絡み合った姿で描かれることの多い神話上の生き物「玄武」をイメージしているという説があります。玄武は、中国の伝統的な宇宙観における四方の守護神のひとつで、北を守護すると信じられています。玄武は、出雲大社が「北」（日本海）の海岸に位置することから、出雲と結びついています。また、亀甲の六角形は、四方と上下の六つの方向で宇宙全体を象徴しています。大国主神の神聖な存在は宇宙全体に及んでいることから、六角形は大国主神の普遍的な力を表しています。

そして亀甲の中の、紋のデザインは、皇室の三種の神器である剣・鏡・玉を象徴していると言われています。

昔の出雲大社の神紋には、内側にある花びらと剣のデザインはありませんでした。代わりに六角形の中には、「存在する」または「ある」という意味の文字「有」が入っていました。この文字は、旧暦 10 月の間に、国の神々が出雲に集まる時期、つまり神々が「存在する」期間を意味して、「有」の文字が使われたという説があります。全国的にはこの時期を「神無月」と呼びますが、出雲では「神在月」と呼ばれています。宝物殿^{ほうもつでん}には、この古い神紋の入った展示物がいくつか展示されています。